

空手道詳説（21）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その5. 薩摩藩支配下の琉球）

（1）薩摩藩による侵略

ア 琉球と大和

琉球国と大和（日本、本土。以下、「日本」と記す。）との交易や交流の歴史は、有史以前から多くの痕跡を残すとしても、特記すべき事項としては以下のとおりで、参考文献やWikipediaなどを基として以下に記す。

① 為朝始祖伝説

平安末期の武将で弓の名手といわれ、鎮西八郎為朝の異名を持つ源為朝（1139～70年）は、保元の乱に敗れた後伊豆大島に流罪となり、流罪先でも傍若無人の振る舞いが多く、よって討手を差し向けられ、敗勢を察しその地で自決して果てたと「保元物語」に記されている。

しかし、琉球国正史の「中山世鑑」（1650年、羽地朝秀編纂）には、為朝が伊豆大島に送られる途上、船が嵐に遭って南方に流され、沖縄本島北部の今帰仁に漂着した。為朝は今帰仁で住民を従えて族長となり、その後、本島南部に広く勢力を張っていた島添大里按司の妹と結婚し、生まれた子が後に琉球国最初の統一王となった舜天である、と記されている。

この為朝伝承が「日琉同祖論」の根拠とされ



歌川国芳の武者絵「英雄一百伝」より

ているが、薩摩藩侵略から40年余り経過した時点で編纂された「中山世鑑」の編集過程において、当代きって頭脳明晰と評判高かった羽地朝秀（1617～76年、尚質王の摂政）は、為朝始祖論を真実と捉えて書いたのか、薩摩を強く意識せざるを得ない当時の国家的背景の元、虚構と知りつつ記述したのか知る由もないが、堂々と明言するところに朝秀のずば抜けた存在感を思う。



羽地朝秀画像



羽地朝秀の墓所（首里平良町の チャーギ山）

② 遣唐使の中止

日本において遣隋使（600～614年）、遣唐使（630～838年が最後）を派遣し、中国王朝に対し国書と貢物を持参しながらも、冊封という関係はなかった。

遣唐使の場合、右図のコース辿ったとする研究結果（wikipediaなど）がある。しかし、当時の造船や航海技術、コンパスのない方位測定、気象学知識の未熟さから、



容易に東シナ海を乗り切きって大陸に辿り着けた訳ではない。また、到達地点も目標とした港に到達するというよりも、行当りばったりの感さえあったため、現地で悶着が発生したりすることも多く、無事任務を果たし帰還できるとは限らなかった。

それでも、当時の世界中で最たる文化や学識を有する大陸に、派遣は繰り返されていたのである。

この図のコースは、上方から「北路」「南路」「南海路」と呼ぶが、「北路」「南路」から流されて「南海路」に至り、沖縄列島の何れかに寄港したのは、危急の場合ばかりでなかった。大陸との往来には、琉球の存在は太古から視野に入っていたのである。

源 為朝が父親とされる舜天が国家統一を成したのは1187年であり、遣隋使、遣唐使派遣の頃は未だ按司が群雄割拠していた時代となる。

遣唐使派遣は、894年太政官だった菅原道真（845～903年）の建議によって停止され、その後907年に唐が滅亡したため、遣唐使派遣の歴史は幕を閉じるとともに、国交や公的交易の道は閉ざされる。

菅原道真は朝廷に仕え忠臣として名高いばかりか、学徳に篤く文人社会の中心的存在であった。第59代宇多天皇（867～931年、在位：887～97年）に重用され、宇多天皇譲位後も第60代醍醐天皇（885～930年、在位：897～930年）に仕え右大臣にまで昇進している。

道真は、宇多天皇治世における中央集権的な財政政策を進めるが、これを嫌う左大臣の藤原時平（871～909年）の反発が次第に表面化し、家格相応の生活維持を望む中下級貴族の中にも時平に同調する者もいた。

この頃既に、民間貿易によって大陸文化が豊富に移入されていたことから、道真は危険を冒してまで衰退期にある唐に派遣して学ぶべきものがないことや、国内の深刻な財政難を考慮し、遣唐使派遣の必要はないと考えていた。

このような情勢の中、時平の画策によって道真は遣唐大使に任命されたのである。こともあろうに、時平の内心は『難破遭難でもよい、慣れない土地柄にあって病死でもよいから、道真が唐から戻らないことを願う』と裏工作したためであった。

894年、道真は改めて自説を称え、派遣中止を宇多天皇に奏上した。理由の大要は次である。

ア 唐の国内情勢は、国家の衰退により悪化している。

イ 派遣により、悪化傾向にある国家財政を更に圧迫する恐れがある。

ウ 新羅の海賊が跋扈しており、航海の危険が増している。優秀な人材が失われるのは国家の損失である。

エ 唐の衰退は、既に私貿易を取り締まる力も失せ、民間商船が航行することにより、遣唐使がもたらす下賜品に頼る必要もなくなっている。

道真の建議奏上に対し、財政の朝廷は、物怪（もっけ）の幸いとばかりにこれを受け入れた。

その後醍醐天皇の治世代になっても、道真に対する世間の評価は高く、天皇の信頼も厚かったが、時平の妬み心はおさまらず、901年に「醍醐天皇を廃して娘婿の齊世親王を皇位に就けようと謀っている」と誣言（おげん、事実を偽っていること）され、罪を得て福岡県の大宰府に左遷され、2年後、嫌疑が晴れることなく無念の内に没している。享年59歳であった。

道真が京の都を去る時に詠んだ「東風（こち）吹かば 匂ひをこせよ梅の花 主（あるじ）なしとて 春な忘れそ」は後世に残る名歌である。

その時の梅が、左遷後に京の都から一晩にして道真の住む大宰府の屋敷の庭へ飛んできたという「飛梅伝説」がある。平成2年福岡県を会場とする国民体育大会の愛称が「とびうめ国体」であった。

道真は、儒学の他に諸事学問に精通し、稀に見る高潔なる人格人品は後々まで人々に慕われ人望を集め、今に至り学問の神様として崇められている。全国各地にある天満神宮がそれである。

この遣唐使派遣の中止後は、長く交易に支障をきたしながらも、貴族社会は唐物によって支えられ、公文書も漢文で作成され続けている。こんな状況の中、常に中国大陸や南方への関心が後を絶たず、特に王羲之（303～61年）の書や、白楽天（772～846年）の詩が好まれ、10世紀から11世紀にかけて醸成される日本的な美的感覚を特徴とする国風（和風、倭風）文化に、大陸から大きな影響を受けている。



大宰府天満宮の賑わい

③ 明の建国

大元の時代（1271～1368年）が終わり、明（1368～1644年。明朝あるいは大明）が建国すると、周辺国に対して使者を送って朝貢を促したため、琉球は中山王の察度（1321～95年、在位：1350～95年）は、1372年いち早く要請に応じ、明との間に朝貢、冊封という主従関係を成立させたが、当時の琉球は三つの勢力に分かれ、三人の王によって統治される三山鼎立という時代であった。

間もなく北山王、南山王も朝貢に応じたため、中山に続き北山王、南山王として冊封を受けている。

時期を同じくして、日本に対しても朝貢に応じるよう使者を送ってくるが、室町幕府第3代将軍足利義満（1358～1408年、将軍在職：1386～94年）は、朝貢によって明の属国となるのを嫌いこれを拒絶した。

義満の時代以降、琉球と日本との間に交易が活発になり、琉球にとって日本や朝鮮（高麗、後に李氏朝鮮王朝）は、明や南方からもたらされる物資の転売地となったため、琉球の交易船は九州、畿内ばかりでなく関東以東にまで出入りするようになる。義満は幕府内に「琉球奉行」を置いて貿易の管理を行わせ、察度王との間で交易に関する文書交換も行っている。

更に、足利幕府は1441年には薩摩、大隅、日向を支配する守護大名の島津忠国（1403～70年、島津氏第9代）に対し「琉球を与える」旨の書面を交付し、1471年には同じく「琉球船取締」の役目を命じている。

その後、備中（岡山県）連島（現・倉敷市）領主の三宅国秀は、中国や東南アジアとの中継貿易が盛んな琉球王国を乗っ取り、自ら琉球王になるべく野心を抱き、1533年水軍による琉球討伐遠征を企てるが、これを察した島津忠隆（島津氏第13代）は、薩摩国坊津で国秀を討滅している。

このように、南方や中国からもたらされる特産物資の交易と権益をめぐり、琉球の存在は極めて大きかった。

④ 朝鮮出兵の兵糧貢納

豊臣秀吉（1537～98年）は、明と李氏朝鮮王朝を征服しようと野望を抱き、1591年の朝鮮出兵に際し、琉球に対し8千人分の兵糧米貢納を命じた。元々琉球は外部に出せる米穀が無に等しかったため、一旦はこれを拒絶するが、秀吉の執拗な圧力に抗しきれず、乏しい中から応じて提供している。

⑤ 薩摩の圧力

薩摩の守護大名である島津氏は、戦乱相次ぐ戦国時代を経て、疲弊した自家の財政を立て直そうと考え、琉球を通じて明と貿易することを望んだため、島津氏の琉球に対する圧力は次第に強められた。

このような情勢の中にあって、前述したように第二尚氏王統第3代尚真王の時代は「琉球の黄金時代」といわれるほど華やかであったが、後継者争いや島嶼部への遠征などが災いして、王朝の力は次第に弱まっていった。

これに乗ずるように、薩摩の琉球に対する圧力は強められ、抗しきれない苦悩が次第に高まっていったと察することできよう。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行